

第 2 回委員会での主な意見と対応方針

No.	項目	意見	事務局の回答（第 2 回委員会）	対応方針
1	現在の地表面表示（閘門）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・樋門の本来的な役割、歴史的な価値をどのように考えるのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機能そのものは既に失われている。ただ、海軍所復元の基準になるのは海軍所稼働期の様子であるため、それをどこまで表現するのかについては議論する必要があると思っている。</li> </ul>	<p>●樋門及び入江状の地形に対する考え</p> <p>①樋門及び入江状の地形の役割は、堤内に溜まった水を堤外に排水するためのものと思われる。</p> <p>絵図等から推察すると、三重津海軍所稼働期にも樋門及び入江状の地形は存在したと考えられるが、当時の正確な位置は発掘調査で確認できていない。</p> <p>②平成 31 年度の埋蔵文化財調査でトレンチを設定し、当時の護岸ラインの有無を再度確認する予定。</p> <p>③調査により護岸ラインが明瞭に確認された場合は、地表面表示による遺構表現を検討する。河川敷の形状変更を伴う地形復元は行わない。</p>
2		<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の地上表示は、あたかも船が入っているように造られていて、現状の調査成果に即したものはなっていない。</li> <li>・入江状の部分について、実際に船が入っていた可能性があるのか、ただの排水溝なのか、という点はこれをどこまで整備するかに影響してくるので検討が必要である。さらに調査して現状以上の成果が出るのか、見極めて考える必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局で検討後、次回の委員会で何かしらの方向性をお話したい。</li> </ul>	
3		<ul style="list-style-type: none"> <li>・三重津海軍所が稼働していた時期に、この場所に入江状のものがあって排水の機能があったのであれば、海軍所の 1 つの構造物としてきちんと評価する必要がある。</li> <li>・今後の整備の過程の中で、その情報収集のための調査等を念頭におく必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局で検討後、次回の委員会で何かしらの方向性をお話したい。</li> </ul>	

【これまでの経緯】

- ・水辺プラザ整備事業、佐野記念公園整備にあわせて元番所樋管を撤去。
- 撤去後、河川の浸食を受けないよう河川側に石積み護岸を整備した上で、入江状の地形があったことが分かるように現在の地表面表示を整備。

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
4	全体の展示構成・ゾーニング・基本動線（案）について	・項目出しされている内容を展示できる材料があるか。展示として対応できること、できないことの見通しを付けて項目出ししておかないといけない。	—	・具体的な展示項目を整理しながら、ストーリーの検討を進める。
5		・一筆書きだと「見せられる」という感じになる。見に行きたいところを見てまた戻ってくるというような発想も入れた方が良い。	—	・三重津海軍所での活動にスポットを当てた展示ストーリーA案と三重津海軍所の創設から解体までを時系列にたどる展示ストーリーB案を融合・再整理。
6		・来た人はこの順番では見ない。面白そうなものがあつたらそこに行く、それでもいいと思う。もう少し柔軟度が高くてもいい。	—	・三重津海軍所で行われた活動に着目し、ある程度自由に見て回っても理解ができる展示ストーリーC案を作成。
7		・物理的な構造からして強制動線はやむを得ない。最初の導入については、まず目に付くドライドックの模型に行くことを前提にしたような構成を考えてみてもよいのではないか。	—	・ドライドック原寸模型の配置案を4パターン作成し、比較・検討を行った。
8		・エントランスから入ってきて最初に見えるのがドライドックの模型。シンボリックな存在として真っ先に目に入ってくることになる。その時、裏側が見えるというよりも入り口側から模型が見えるように配置した方がインパクトはあるのではないか。	—	・ドライドックの大きさ・構造を見せる原寸大模型と大型スクリーン映像とのセット演出、展示スペース等を勘案し、事務局案を再整理。

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
9	全体の展示構成・ゾーニング・基本動線（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>佐賀藩の近代化事業に関する展示は、佐賀城本丸歴史館でも取り扱っている。三重津海軍所跡に特化してもいいのではないかと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>中2階の佐賀藩の近代化事業に関する展示は、2階の佐野常民展示室とのつながりを意識する必要がある。精煉方というよりは佐野常民がどのように近代化事業に関わったかというのを中2階でうまく示せると2階の佐野常民展示室にすっと入っているのではないかと目論見があるため、二つに分けて説明せざるを得ないということが背景にある。重複する部分もあるので少し整理をしたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>三重津海軍所の概要を説明する際の歴史的背景では年表として出来事に触れ、中2階では、1階の三重津海軍所跡の展示と2階の佐野常民の展示を繋ぐ「海防強化の取り組みとそれを支えた人物」を紹介するストーリーに再整理した。</li> </ul>
10		<ul style="list-style-type: none"> <li>「佐賀藩の近代化の背景」となっているが、「近代化」という1つのベクトルを目的にしているというよりも、佐賀藩にとっては幕府に奉公しているという感覚だったことを表現してほしい。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>佐賀藩が近代化を行ったのは、担当していた長崎警備における海防強化の一環であったことを展示解説の中で表現する。</li> </ul>
11		<ul style="list-style-type: none"> <li>インパクト重視の空間を作るとしたらという話だが、もし有料展示室に入っていくなりドライドックが見えた方がいいという話になれば、展示室内には壁等は作らず自由に行き来できるような空間として設計できるということになるのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まだ明確にどういう形で模型を作るとか、それをどこに置くとかまでを詳細検討した上でのストーリーではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>展示ストーリーC案にあわせて1階の三重津海軍所跡展示室は概ね自由動線として再整理を行った。</li> </ul>

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
12	全体の展示構成・ゾーニング・基本動線（案）について	・共通展示は有料展示室に入る前にあたって良い。	・世界遺産から始まり、各論へという流れにしてほしいと国からは言われている。その場所が同一のエリアにないといけないとまでは言われていない。	・共通展示は1階エントランス横への配置で検討。 ・今後、内閣官房とも調整を進める。
13		・三重津の展示の全体構成を考えるにあたっては、同じところに共通展示を入れない方がまとまりが付きやすいのではないかと思う。	—	
14		・ドライドックは非常に印象的で、それを掴みとして見せていくと考えは確かにあると思うが、一方で事務局案はドライドックを相対化している点で評価できる。真面目な展示ということになるかもしれないが、A案・B案の事務局案でもいいと思う。	—	・三重津海軍所での活動にスポットを当てた展示ストーリーA案と三重津海軍所の創設から解体までを時系列にたどる展示ストーリーB案を融合・再整理。 ・三重津海軍所で行われた活動に着目し、ある程度自由に見て回っても理解ができる展示ストーリーC案を作成。
15		・実際に現地（屋外）に出る前に、記念館3階から俯瞰することが大事だと思う。全体像を頭で理解してから現地に行ってもらった方がいい。	—	・3階に先に誘導するストーリーで整理。
16		・解説は新聞程度の大人向けにして、所々に子ども向けの仕掛けを置くというのが現実的ではないか。	—	・展示解説のレベルはある程度大人向けに設定。所々に子ども向けの仕掛けを置くことを検討する。

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
17	全体の展示構成・ゾーニング・基本動線（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>樋門の部分は15年前の整備で埋めてしまっているだけなので、地形の復旧は課題だと思う。完全に遺構が壊れているものならばともかく、埋めているだけなのであれば復旧をして史跡としての本来の形状をわかりやすくするという事は重要だと思う。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成31年度の埋蔵文化財調査でトレンチを設定し、当時の護岸ラインの有無を再度確認する予定。</li> <li>治水の観点から元の地形を復元することは困難と考えるため、調査により成果が得られた場合は、地表表示を検討する。</li> </ul>
18		<ul style="list-style-type: none"> <li>展示ストーリーの中で、三重津で行われた活動だけでなく、例えば船がどこまで行っているのか、長崎だけでなく電流丸で瀬戸内海を通過して参勤交代を行ったとか、他の地域とのつながりなども示せたらいい。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>「佐賀藩保有の洋式船」コーナーで整理。</li> </ul>
19	ドライドックの表現方法（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>漠然としたものであっても現地でそれなりの実感をしてほしい一方、平面表示であっても今のところドライドックの片側の側面しかわかっていない。かなり推測の多い全体像を示すのが良いのかは悩ましいところ。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺構の表現方法の中で、ドライドックの表現方法を再整理。</li> </ul>
20		<ul style="list-style-type: none"> <li>どの辺りにあったのか、どの範囲だったのか、どういう形だったのかという要求は必ずある。全部わかりませんというのは不親切。</li> </ul>	—	
21		<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的にはドックの面は直線、曲がったりしない。2点、3点を基準に推定の線を引けないことはない。</li> </ul>	—	

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
22	ドライドックの表現方法（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際にどこまでかという確定情報は両岸ともに見つけられない。あくまで残った部分の形態でしか判断できないこととなる。ある程度の想定はできるとしても、そこがどこまで想定でどこまで根拠づけられるか、その境目がわかるような表現方法で対応せざるを得ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南側で確認されている3・4段目は、北側のものとシンメトリーな構造をしているので1・2段目も同様ではないかと仮定はできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺構の表現方法の中で、ドライドックの表現方法を再整理。</li> </ul>
23		<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔の展示はメタデータは出さないで結論だけをさも当たり前のように解説するというのが主流だったが、プロセス・方法を説明するのは非常に重要で、社会教育施設であるという観点に立てば、そのことを織り込んだ展示は非常に意味があるものと思える。どういう考え方をしてこの仮の線を引いたのかという説明をすることはそれなりの意味があると思う。</li> </ul>	—	
24		<ul style="list-style-type: none"> <li>・確定しているところと曖昧なところは表現方法を変えればよい。ラインは引いておいて、かつそのラインが明確なものなのか不明確なものなのかわかるようにしておけばよい。</li> </ul>	—	
25		<ul style="list-style-type: none"> <li>・分かっているところは実線で、想定のところは破線で表現する。</li> </ul>	—	

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
26	ドライドックの表現方法（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立体表示にしても平面表示にしても、設計図書にする段階で復元考察という形で遺構図から引けるラインを明らかにしてもらって、実線と破線の範囲を整理し、どういう前提でこう考えたかという復元考察をしっかりと図書に入れておいてことが重要。尚且つ、それをベースとして整備案としてこうしたということが示せたらいい。</li> <li>・ 整備の中で、はっきりしていることと、はっきりしていないことを表現を変えて示すということはよくやる。ただ、見る方からすれば逆にわからなくなることもありえる。むしろ、全体としてこういう想定のもとでこう考えたというラインを、表現は変えずに示すというのもありなのではないかと思う。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遺構の表現方法の中で、ドライドックの表現方法を再整理。</li> </ul>

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
27	ドライドックの表現方法（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>掘り込みを入れると危ないのと、どれだけ掘ったからどうなるというものでもない。ただ、3階からも見るので、グラデーションによる表現例とオルソ写真による表現例の2例を合体したようなものではだめなのかなと思っている。電流丸のラインを入れるのも賛成。</li> <li>デジタルでどこまでできるのかがわからないが、例えばドックの縁に立ってのぞき込んだら VR で深さがわかるとか、ドックの中心に立つと壁の高さを感じられる表現がデジタルのできるのであればそれも良いのかなと思う。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺構の表現方法の中で、ドライドックの表現方法を再整理。</li> </ul>
28		<ul style="list-style-type: none"> <li>グラデーションをつけるのはそれなりの高低があるんだというイメージを覚えてもらうにはいいかもしれない。</li> </ul>	—	
29		<ul style="list-style-type: none"> <li>電流丸の大きさを示すのはいいが、どこのレベルの線を入れるのか。</li> <li>上甲板でいくとドックの範囲をはみ出すかもしれない。</li> <li>ドックの上面における電流丸の大きさなど、どこの大きさか決めておいた方がよい。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>電流丸の水平投影範囲（真上から見た範囲）の表現を行う。</li> </ul>



No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
30	ドライドックの表現方法（案）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平面表示が良いか、立体表示が良いかということでは、一段は下げた方がいいと思っている。少しでも下げておくと現地ではイメージしやすい。</li> <li>・表現上舗装をするかということについては、舗装は一切しないほうが良いのではないかと思う。地下水位が高く、水にも浸かるところのようなので、舗装が割れてくるのではないかという懸念がある。</li> <li>・後々の維持管理を考えると、草刈りだけすれば維持できるようなメンテナンス性の高い表現が良いのではないか。</li> <li>・遊び心をいれるのであれば、水に浸かったらドライドックが見えてくるなどのアイデアはある。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺構の表現方法の中で、ドライドックの表現方法を再整理。</li> </ul>
31		<ul style="list-style-type: none"> <li>・舗装した場合、地下遺構の保全に影響を与えることはないか。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成31年度にドライドック付近に観測井を設置し、地下水のモニタリングを開始する予定。観測結果を踏まえ、排水や舗装の設計に反映させることとする。</li> </ul>
32		<ul style="list-style-type: none"> <li>・水を遮断することは避けた方がよい。完全に遮断・シャットアウトするのではなく流れがあった方がいい。池の水は腐るが、川の水は腐らない。水はたまるより動く方がいい。</li> </ul>	—	
33		<ul style="list-style-type: none"> <li>・立体復元でFRPということが書いてあるが、5～10年で悪くなる。やるのであれば立体陶板等を考えたほうがいい。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺構の表現方法の中で、ドライドックの表現方法について再整理。</li> </ul>

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
34	モニタリング手法の検討について	<ul style="list-style-type: none"> <li>三重津の場合、遺構に近い位置に井戸を開ける、あるいは発掘した際に井戸を埋め込んでおくことが可能であれば、そこに計測装置を落とし込んで地下の水位の変化などの経過を見ていくことが一番現実的だと思う。</li> <li>木材が腐るのは酸素による。それを測るのは酸化還元電位。酸化還元電位を測るセンサーを井戸の中に落とし込んで定期的に測定する。地下水位の変化も当然見ていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に管を埋めることは必要だと思っている。現在発掘調査をしてはいるが、現地整備をする時にするのか、整備の前であってもモニタリングのための管の埋め込みは実施するのかについてタイミングをはかっていく必要がある。</li> <li>発掘調査の時に遺構のない面を測量しておけば、遺構があるかないかの確認をせずに埋め込みもできる。そこは色々な手法を考えながら場所の選定やタイミング、方法等を考えてはどうかという話はあったので、今後検討していきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>モニタリング計画（案）として整理。</li> <li>今回の基本設計では考え方を整理し、次年度以降モニタリングを実施し、追加基本設計の際に判断を行う。</li> </ul>
35		<ul style="list-style-type: none"> <li>観測用の井戸は最低1カ所必要。多い方がいいが2、3カ所の話。</li> <li>深いところに1カ所と浅いところに1カ所は必要。深い方はよいが、地下水位の影響を受けやすい浅い方が心配。酸化還元電位は地下水の深さに関係する。</li> </ul>	—	
36		<ul style="list-style-type: none"> <li>モニタリングについても、今何をやっているのかお客さんに説明するというのは必要。何でドライドックを見せてくれないのか、というのは素朴な疑問としてついて回るので、どうやって遺構の保存がなされていて、それがきちんと保存されていることをどうやって確認しているのかなどを展示の中で見せていいのではないかと思う。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>「実物を見せられない理由」を1階展示室で、「遺跡のモニタリング情報」を3階で展示することを展示ストーリーC案で整理。</li> </ul>

No.	項目	意見	事務局の回答（第2回委員会）	対応方針
37	モニタリング手法の検討について	<ul style="list-style-type: none"> <li>酸化還元電位は数値で見られるので、その数値が示されていて安全であることを表示するなど、なぜそういう事をしているのか説明することは必要。</li> <li>説明をして安心していただくし、なぜ見せられないのかということの説明することも必要。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>「実物を見せられない理由」を1階展示室で、「遺跡のモニタリング情報」を3階で展示することを展示ストーリーC案で整理。</li> </ul>
38		<ul style="list-style-type: none"> <li>小さくてもいいので保存のコーナーを作っていただくとよい。</li> </ul>	—	
39		<ul style="list-style-type: none"> <li>刻々と変化する数値を見せてあげる等、リアリティーの示し方は色々ある。</li> </ul>	—	
40		<ul style="list-style-type: none"> <li>今までどうして土の中で保存されてきたのかを説明することも、有明海との関係で三重津の地理的な環境を示すことになるし、地理からさらに地質の話も交えて、なぜこの場所に海軍所があるのか、という話にもつながっていくと思う。</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>三重津の地勢と環境については、「三重津海軍所の概要」で整理。</li> </ul>